

---

# 世界を周るは転生者(チート) i n 恋姫無双

チルノ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

世界を周るは転生者<sup>チート</sup>in恋姫無双

### 【Nコード】

N1811BA

### 【作者名】

チルノ

### 【あらすじ】

リリカルな世界のお話。

まだ書いてないがStsのあと転生して此処に来た感じです。

ここでは魔法はほとんど使いません。よくて治癒とかです。

では桜花君の激動の恋姫物語！はじまりはじまり！

でもやっぱチート・・・

## プロローグ(前書き)

同時進行です。けいおん！のへまはもう犯さない・・・！！！！

## プロローグ

はいどうも、毎度おなじみ桜花君です。えー現在リリカルな世界でも活躍している俺ですが。

同時進行で恋姫の世界に来た話しをしたいと思います。

あ、でね？予断なんだけど、転生の度に性格が変わる見たい。肉体に精神が引つ張られる感じで、まあ容姿なんていくらでも変えられるんだけどね？で、今回は優しいお兄さんだつて！！だからリリカルの方とはかなり別人となってるよ！気をつけてね！？

「さて、お知らせ的なのも終わったところで・・此処はどこかな？」

目の前に広がる広大な荒野。どうしようかと考える。

すると、後ろから気配がして振り返る。そこには原作でも見る三人の賊。

「兄ちゃん、珍しいもん着てんじゃねえか……金目のもんと一緒に身ぐるみ置いて行きな！」

「早く、渡した方が身のためなんだな！」

「オラオラ！早くしろよ！！！」

ふむ、確かに俺の現在の衣装はリリカルの時のバリアジャケットとほぼ同じだ色は多少変わったが。

この国にはこんな服は確かに存在しないだろう。ん？よく見ると

俺の下に倒れている人がいる。

こ、こいつは！あの恋姫主人公にして種馬！北郷一刀じゃまいか！！

「おい、おい！起きろ！」ぺちぺち

「うん．．．はっ．．．ここは．．．？」

「とりあえず、立てるか？」

「あ、ああ．．．ありがとう．．．えとあんたは？」

「ああ、俺は．．．そうだな、性を風、名を華、字を衝だ風華と呼んでくれ。」

「あ、ああ（この人の名前．．．此処は日本じゃないのか．．．）、え〜と、俺は北郷一刀。性が北郷で名が一刀になる。字はない。」

「あ、自己紹介中悪いけど今そんな状況じゃないんだわ。」

「え？」

一刀君が後ろを見るそこには無視されまくって、怒りまくってる賊の三人。今にも切りかかってきそうだ。

「えええ！？何この状況！？」

「一刀君、君は刀使える？」

「え？あ、はい一応」

俺は空間から二振りの太刀を取り出す。二対一刀の双刀、黒刀と白刀だ。その内の白刀を手渡す。

「君には辛いかも知れんが、覚悟を決めてくれ。」

俺は一刀君にある覚悟を迫る、別に今じゃなくともいいが早くに決めるに越したことはない。

「……………人を殺す覚悟を」

「え？どういう…？なっ…まさか!？」

一刀君が驚いている。

「人を殺す覚悟だ。」

一刀君が沈んでいる。悩んでいるようだ。

「ま、嘘ですけどね」「ずしゃあ！」

そう言っつ俺は三人の賊を一瞬で切り払った。

「んなっ…!？」

「じゃ、話を続けようか。」

一刀君は白刀を返してくる。俺はそれを受け取りしまっ。

結論から言えば、一刀君は俺に付いてくることになった。行くあても無いから当然か。

そう言えば、一刀君が荒野で襲われてる時趙雲さんとかが助けに来るはずだけど・・・来ないね。  
今がいつの時代なのか確認しないと！

「なあ一刀？とりあえず村に向かうぞ？いいか？」

「いいよ、桜花。まかせる」

ちなみに俺と一刀は真名を交換しました。

「んじゃ行くこうか。」

そうして二人は歩き出す。

これが天の御使いと後の最強の単騎戦力の旅の始まりだった。





二話にして別離！？そして出会う曹操（前書き）

なんか、展開が読めない・

## 二話にして別離！？そして出会う曹操

結論から言うと、俺と一刀は旅の道中いろいろなことを話した。

この世界が一刀いわく（俺も知ってるけど）三国志と言う時代と言うコト、一刀が未来から来てこの世界の未来を知っている事。

今は原作の12年ほど前であること。など俺の事はまあほどほどに教えた、知識があることは内緒、力の事も内緒だけど。まあ、性格面や何をやってるか？とかね。そんなこんなで村に着いたと思ったら、街についた。未来の霸王、曹操の故郷っぽい。

「ま、結果的には良いつてことで。曹操さん家に挨拶行こうか。」

「そうだな。俺も今の時代の曹操に会ってみたいし。」

「じゃ、決定。行こう」

「ああ」

・

・

・

「でも、お前聞いたか？」

「なにを？」

「なんか、どっかの占い師がこの漢の時代を救う天の御使いつてのが来るって言ったらしいよ？なんでも見たことない格好してるんだと。これお前の事じゃね？」

「え、マジか・・・多分そうだな・・・どうすればいいんだ？こういうとき」

「知らん。だが・・・まあ、仕官する分には問題ないだろう。なんせ未来つてのを知ってるんだし？」

「そっか・・・」

なんか一刀君が思い耽ってる・・・まあ、なにか思うことがあるんだろっね。

「さ、着いたよ。すいまつせーん！誰かいますかい？」

「あら？誰かしら？」

あらら、曹操さんに似てる女の人だ。おそらく・・・母親かな？

「んっ・・・天の御使いさんとその付き人です。」

「ちよっ・・・!?!？」

「へえ・・・天の御使いさんが何の用かしら？」

彼女の目が細くなる、品定めしているような感じだ。

「いえ、ちよっと挨拶に。よければこの仕官しようかと。」

俺は一刀に今は俺に任せるとアイコンタクトを送る。

「あら、そうなの？・・・確かに占い通り綺麗な服を着てるわね・・・」

「でしよう？どうでしょう？」

「・・・」

一刀君が黙ってる。天の御使い少しは喋れよ。

「証拠はあるのかしら？天の御使いたるその証拠は？」

「ふむ・・・この天の御使いは・・・そうですね、隠すことも無いでしょう。この人はこの国の未来を知ってます。」

「なっ・・・！？そう・・・それは本当・・・みたいな。嘘をついてるようには見えないし。」

「ですか。あ、申し遅れました俺は性を風、名を華、字を衝と言います。こっちは」

「あっ・・・お、俺は北郷一刀。性が北郷、名が一刀だ、字はない。」

「ふ〜ん・・・そ 私は性を曹、名を映、字は震よろしくね？」

「ええ、よろしく願います。では」

そう言い、俺は一刀を残して去る。すると一刀と曹映さんがひきと

めてきた。

「え？待ってくれよ。桜花？」

「あら？貴方は来ないの？」

「ええ、俺はここに士官はしません。それにこの方とも別々の道で進もうと約束しましたしね？」

「ふうん、まあいいわ。」

・・・一刀がなんか話したそうだ。しかたない・・・

「じゃあ、少しこの方と話しても？」

「ええ、良いわよ。」

「じゃあ、少しだけ」

・

・

・

「どづいつことだ？桜花？」

「俺は、この時代の未来を知らない。でもお前が話してくれた中で  
は曹操ちゃんが一番の勢力になるんだろっ？」

俺は、ここに来る途中少しだけ一刀に未来を聞いた。知ってるけど

「あ、ああ・・・」

「なら、お前はそこに居た方がいい。一番安全だし、暮らしにも余り困らない。仕事さえできれば置いてくれるだろ。」

「なら、お前も残ればいいじゃないか！」

「俺は残らない。もう少しだけこの世界を見て旅がしたいんだ。」

俺は一刀にそう言う。

「そうなのか・・・」

「そう心配するな。大丈夫、俺は死んだりしないよ。この世の中は確かに物騒だ、でも俺は大丈夫。だからお前は生きてくれ。俺はお前の事を親友だと思ってる。だから生きてほしい、お願いだ一刀。」

俺は真剣に一刀と向き合う。

一刀はしばらくうつむいていた後、顔をあげてこういった

「分かった。だから俺と約束してくれ。必ず、生きてまた会って。そう約束してくれ！」

「・・・分かった。良いよ、必ず生きて、また会おう！一刀！」

「ああ、ここまでありがとう。約束だ、親友！！」

「おう・・・じゃ、またな。」

そう言っただけはまた去ろうとするともたも引き留められた。

「ちょ、ちょっとまってくれないかしら!!?」

「え？曹映さん・・・えと・・・なにか？」

思わず聞き返してしまう。どうしたんだろう？

「はあ・・・はあ・・・あの、うちの娘の曹操を見てないかしら・・・！」

「曹操・・・ちゃんですか？」

「見てないよな？桜花・・・？」

「ああ・・・どうかしたんですか？」

「いなくなっちゃったのよ・・・城にはどこにもいなくて・・・見かけたら連れて来てくれる？」

「はあ・・・まあいいですけど。いくつですか？その曹操ちゃんは？」

おそらく原作の12年前だから6、7歳くらいははずだ。原作じゃみんな18歳超えてたし。

「ええ、7歳よ。しっかりしてる子なんだけど・・・いかんせんまだ子供だから・・・」

「ああ・・・分かりました見かけたら連れてきます。では・・・またな、  
一刀・・・」ぼそっ

「!・・・ああ、またな!!」

俺と一刀はそう言って別れた。いい奴だねえ・・・一刀は。

・  
・  
・

で、今俺は困惑している。  
なぜなら・・・

「えと・・・どうしたの？君・・・名前は？」

「曹・・・猛徳・・・」ぐすっ

そう、曹操ちゃんに会ったからだ。しかも泣きつかれている。  
なぜこうなったのか、説明しよう。

\*



「さて・・・と。曹映さんの領地は抜けたけど・・・曹操ちゃんは一見見たかったな。ははは・・・」

そう言つて領地の外の森を歩く。かなり歩いていたが、日も暮れている。村も見えないので野宿の準備をしていると

「んー!!!んー!!!」

「こらっ!ガキ!大人しくしやがれ!!」

とそんな声が聞こえた。まあ、この性格上助けないわけも行かない。声の方に歩いて行くと、そこには小さいが5、6人くらいは入れそうな小屋があつた。そこからさらに声が聞こえる。

「もういいから、殺しちまおうぜ。このクソガキ」

「ん・・・確かに、奴もさぞ悔しがるだろうな!」

「んー!!!んー!!!」

はあ、行くか・・・!!

ドカツ!!!

入口のドアを蹴り壊して入る。そこには拘束された幼い少女と取り囲む3人ほどの男がいた。その内2人は武器を構えてこちらを見ている。・・・クズだなこいつら。Yes!ロリ!Noタッチ!という言葉を知らんのか?

「なんだ！てめえ！」

「邪魔するな！なんならお前から斬り殺してやる！！」

そう言つて武器を持っている二人が斬りかかってくる・・・が遅い。

チンツッ！

と鐸鳴りの音が響く。俺が刀を鞘にしまった音。

すると、二人は腹から血を噴き出して絶命した。残りの一人は怯えながら逃げようとしたが、鋼糸で首を落とす。

そしてその中心にいる拘束され、泣いている短い金髪の女の子に近づく。

「ん・・・んー！！」ぼろぼろ

「大丈夫、俺は君に何もしないよ。大丈夫かい？」スルツ

拘束を解いてやる。

「けほつ・・・あ・・・あなた・・・だれ・・・？」

「ん・・・正義の味方さ」

そういつてほほ笑む。すると安心したのか気を失ってしまった。それを支え、抱き上げる。

よほど怖かったんだろう、そして俺は野宿しようとしていた場所まで戻る。

「さて・・・火でも焚いて、まずは食糧だな。ま、別空間に入ってるから困らないけど。」

俺はその日少女に毛布をかけて寝かせてやり、飯を食べて眠った。

・

・

・

で、翌朝。川があつたので水を汲んでいると泣き声が聞こえた、少女が起きたようだ。

それで戻ると、少女と目が合う。その少女は俺を見つけると近づいて抱きしめてくる。

で、最初の場面になるわけだ。

\*

「ん？じゃあ、きみが曹操ちゃん？」

「え・・・？私を知ってるの？」

朝食を二人で食べている時にそう聞くと、曹操ちゃんはびっくりした顔でそう言う。

「ん、まあ曹映さんに聞いたからね。」

「お母さん・・・?」

「そ、きみを見つけたら連れてく様に言われたからね。」

そついうと曹操ちゃんは安心したように笑った。

・・・この子が将来・・・百合になるのか・・・なんだかなあ・・・

「じゃあ、曹操ちゃんはなんでこんなところに?曹映さんの領地からはかなり遠いところだけど此処。」

「えと・・・勉強してたんだけど・・・嫌になって飛び出して来たら・・・昨日の人達にさらわれて・・・気が付いたらココにいたの」

「・・・そっか」

俺は曹操ちゃんに近づく。そして抱きしめて安心させるように言った

怖かっただろう?頑張ったね、よく頑張ったね。

すると曹操ちゃんは抑えていた感情を吐き出すように、ぼろぼろと大粒の涙を流した。

・  
・

「落ち着いた？」

曹操ちゃんは何も言わずに「くん」と一つうなずいた。

「そうか、それじゃあ。お母さんの所へ連れてってあげる。歩けるかい？」

「うん」

「じゃ、行くうか。何かあったらすぐに言ってね？」

「うん／＼／＼」

顔が赤い、熱でもあるのだろうか？そう思い、曹操ちゃんの額に手を当てる

「ふえ！？／＼／＼」

「ん〜顔が赤いから熱でもあるのかと思ったけど・・・大丈夫そうだね」にこにこ

「／＼／＼／＼」

う〜む・・・ますます顔が赤い。この先大丈夫だろうか？  
そう思いながら、二人で歩く。

「曹操ちゃん」

「あ、あの！」

「え？な、なに？」

急に曹操ちゃんが声をあげる。驚きながらも聞き返す。

「あの・・・華琳って呼んでください・・・！」

「でも・・・それは真名だろう？いいのかい？」

「はい・・・い、命を救ってくれたし・・・その・・・／／／／／」

まあ、預けてくれるのはうれしい。ありがたく受け取っておこう。

「うん分かった、いいよ。あ、俺の名前教えてなかったね。俺は性を風、名を風、字を衝って言うんだ。じゃあ、俺も真名を預けよう、俺の真名は桜花。よろしくね華琳ちゃん」

しゃがんで華琳ちゃんの目線に合わせ微笑んでそういった。すると華琳ちゃんは顔を赤くしながらも言った

「は、はい！よろしくお願いします！お、桜花さん！／／／／／」

顔真っ赤・・・ああ、照れてるのか。可愛いねえ、微笑ましいよ。

そんなこんなで、真名を交換した。

・  
・  
華琳視点

\*

私は、今ある人と故郷に向かって歩いている。

先日勉強が嫌になり飛び出したところ、賊にさらわれた。

そして抵抗していたけど・・・子供の力では大人の男の3人は振り払えなかった。

しびれを切らした賊達は私を殺そうとした。その武器の煌きが私の恐怖心を奮い立たせ、身体を硬直させた。

「んー!!んー!!」

私はそんな状態で精一杯叫んだ。涙を流しながら、助けて!とそうして遂にその刃が振り下ろされそうになった瞬間

ドカア!!!!

扉を破壊して見たことない服を着た男の人が入ってきた。

そしてそれを見た賊の二人がその人に斬りかかる。私は目を瞑った。しかし

「遅い」

そんな声で目をあけると男の人は立っていた。すると傍に居たもう一人の賊が急に青い顔で逃げていくすると、その賊は急にふらりと

倒れた。みると首が体から離れている。

「ん・んー!!」ぼろぼろ

怖かった。次は私が殺されるんじゃないかと思ったから。すると、その男の人は優しい声で私の拘束を解きながら言った。

「大丈夫、俺は君に何もしないよ。大丈夫かい？」スルツ

それで喋れるようになった私は聞いた

「けほっ・・・あ・・・あなた・・・だれ・・・？」

「ん〜・・・正義の味方さ」

そう答えた男の人の笑顔を見て、私は意識を失った。

そして、今その人が私は好きになった。その笑顔が余りに綺麗だったから。一つ一つの仕草がとてもかっこよく見えたから。そして勇気を振り絞って、真名を預けた。するとその人は笑顔で私の目線に合わせてかがみ、桜花という真名を預けてくれた。

\*

「でだ、華琳ちゃん。」

「なんですか？桜花さん」

桜花さんが真名を呼んでくれたことに少し嬉しく思いながら聞き返す。



「華琳ちゃんはどうして飛び出してきちゃったのかな？」

「あ・・・やっぱり勉強が嫌になったから・・・」しゅん

少し落ちこみながら言う。

「そうか・・・まあ、根を詰めるのはあんまり良くないからね。でも勉強自体は悪いことじゃない。分かる？」

「はい」

「まあ、ほどほどにした方がいいんだよ。俺も曹映さんに言ってみるから、自分でも自分の考えをぶつけてごらん？言葉にしないと伝わらないこともあるんだから。ね？」

桜花さんの言葉は説得力があり、なぜか納得できた。

「はい！」

私は桜花さんの不思議と安心できる雰囲気さらに好きになった。

・  
・  
・

曹映視点

「あの子はまだ見つからない？」

「え、ええ・・・俺の方も見かけないですね・・・」

私は天の御使い、北郷一刀に先刻から何度も確認している。昨日から食事ものを通らない。

「報告します！」

すると一人の兵士が入って来る。

「どうしたの？華琳は見つかった？」

「はっ！そのことでございますが・・・曹操様が何者かにさらわれたらしいとの報告が・・・」

「なっ！？それはいつの事!？」

「はい・・・昨日の昼ごろだと・・・」

兵士は言いづらそうにそういった。私はその余りの衝撃に脱力する。

「そ、早急に探し出してくれ！」

なにも言えない私に代わって北郷がそう言つと、兵士は了解と去っていく。

「華琳・・・」

「曹映さん・・・大丈夫さ！きっと大丈夫・・・！！」

慰めてくれるが、私はなにも聞こえなかった。

・

・

・

桜花視点

さて・・・華琳ちゃんと共に曹映さんの領地に戻ってきた俺こと桜花。

「さて、帰ってきたね。」

「はい」

「曹映さんも心配してるだろうし、さっさと帰ろっか」

「はい！」

で、華琳ちゃんの家に向かって歩いていたら、  
囲まれました。Why?何故?

「あのー？一体なんの騒ぎです？」

「黙れ！曹操様をさらったのは貴様か！！」

あるえ〜？華琳ちゃんをさらったの俺になってない？

「・・・あの・・・俺、その華琳ちゃんをさらった奴のして連れてきた  
んだけど？」

「曹操様の真名まで！？貴様！どこまでも無礼な奴！！」

話し聞いてよ・・・

「なあ、華琳ちゃん・・・これどうすればいいのかな？」

「さ・・・さあ・・・せめて母が来てくれれば・・・」

幸いなことに華琳ちゃんが俺のそばに居るせいか中々かかってこない。つまり硬直状態だ。

「ん〜・・・」

と、考えていたら。

「華琳！！」

「母上！！」

と曹映さんが来た。

曹映さんは俺を見ると兵士を下がらせた。

「え〜と・・・貴方が華琳を？」

「え？それはさらったのか？と聞いてます？」

「い、いえ助けくれたのかと・・・」

「そうですね。殺されそうになったのを助けて、曹操と聞いて約束通り連れてきたんですよ。」

「あ、ありがとう！！」

はあ・・・この兵士は話を聞かないと記憶しとっつ。

「いえいえ、では俺はまた行きますね。」

と踵をかえして行こうとすると

「華琳様をさらったのはおまえかあああああ！……！！……！！」ブン！  
！！！！

ガキーン！！！！

「え〜・・・なに君・・・？」

なんか襲われました。

一話にして別離！？そして出会う曹操（後書き）

最後のは原作でも華琳様主義なあの姉妹の姉です。

**夏侯惇登場、旅の始めと惨劇（前書き）**

今回は、曹操さんところから出発します。

## 夏候惇登場、旅の始めと惨劇

今、俺は困惑中である。  
なぜなら……

「えと……もつかい聞くけど……きみ誰？」

「我が名は夏候惇！華琳様の矛にして楯！そして！貴様を殺す相手だ！！」

不意打ちよろしくさらに連打で体に見合わない大剣を振るう少女、  
名前は夏候惇と言うらしい。

つまりは原作で華琳ちゃんの右腕だったあの子ですね？

「で、それは分かったけど……なんで俺が攻撃されてるの？」

その攻撃を軽く受け流しながら問う。幸いまだ扱い慣れてないのか、  
剣の腕は未熟だったので俺の相手をするには幾分幼い。

「貴様が華琳様をさらったからだ！！」ぶんぶん！！

「ちよつ……それ勘違いじゃん……！！……仕方ない……ふつ  
！！」「ギイン！！」

俺は大剣を持つ夏候惇ちゃんの腕の隙間に刀を滑り込ませ、峰で柄  
をはじく。

すると簡単に大剣はその小さな手からこぼれおちた。

「あつ……き、貴様……！！！」



「そこまでよ、春蘭・・・」

「え？か、華琳様？」

「ちよつと来なさい・・・」「ずいじい・・・」

なんか華琳ちゃんに黒いオーラが見えるんだけど・・・怖っ！  
で、華琳ちゃんが夏候惇ちゃんを連れてどこかへ行ってしまった後、  
曹映さんが詫びてきた。

「悪かったわね、あの子華琳の事になると周りが見えなくなっちゃ  
うものだから・・・根はいい子なのよ？頭はよくないけど・・・」

「いえいえ・・・それとそこに居る子はどうしたのかな？」

俺は、俺の後ろの方・・・夏候惇ちゃんの来た方に隠れている少女に  
問いかけた。

その子はおずおずとした感じで出てくる。

「あ・・・夏候淵です。さっきの夏候惇の妹です。」

「へ・・・君は元気な夏候惇ちゃんとは違って大人しいんだね？そ  
れでどうかした？」

俺は、華琳ちゃんの時同様視線を合わせて話す。

「えと・・・さっきは姉が失礼しました。ごめんなさい」

ぺこりと頭を下げ謝る夏候淵ちゃん。ちよつとびっくりしながら

も優しく言い返す。

「気にしないで。それだけ華琳ちゃんを大事に思ってるんだろっさ。」

「……ありがとうございます。」

ふむ……昔の夏侯淵ちゃんは結構口数が少ないんだねえ……でも凛々しい顔してる。

「あの、風華さん？ちょっと良いですか？」

曹映さんが話しかけてくる。

「なんですか？」

「あ、北郷もいい？」

「あ、ああ。いいよ」

「それで、風華さんと北郷には華琳を助けてくれたこととこれから私と共に歩んでくれることで真名を預けたいのだけど……良いかしら？」

ん？……どうやら曹映さんは俺達に真名を預けてくれるらしい。これは嬉しいじゃないか。

「もちろん良いですよ。俺の真名は桜花です。あなたに預けましょ」

「あ、ああ・・・俺は一刀だ真名はないからこれが真名になる・・・の  
かな？」

「桜花に・・・一刀・・・確かに預かったわ。私の真名は縁華。よろし  
くね！」

曹映さんはとてもいい笑顔でそう言った。すると俺の羽織をくいく  
いと引つ張る者がいる。

下を見ると夏候淵ちゃんが居る。

「どうしたの？夏候淵ちゃん？」

「私もお礼に・・・真名を預ける・・・私は秋蘭」

「・・・いいの？」

俺は急なことに少し驚いたが、そう聞く

「いい。華琳様を助けてくれたから。」

「そっか、じゃあ秋蘭ちゃん、俺の真名は桜花だ。よろしくね」に  
こっ

目線を合わせて笑顔でそう言うと。秋蘭ちゃんは少し赤くなりながら

「よろしく願います・・・／＼／」

そう言った。華琳ちゃんといいどうして赤くなるんだろうか！

「ん、それじゃあ俺はそろそろ旅に出ますわ。じゃあ、今度こそま

たな一刀」

「ああ、またな桜花」

「じゃあ、失礼します縁華ちゃん。秋蘭ちゃん」

挨拶をして踵を返す。その時に縁華ちゃんがちゃん付けで呼ばれたことに少し赤くなっていた。

・

・

・

街の出口に着くと、華琳ちゃんと夏侯惇ちゃんが居た。

「桜花さん、言っちゃうんですか？」

華琳ちゃんがしゅんとした感じで言う。というかあの未来の霸王さんに敬語使われてるよ俺・・・結構すごいことじゃない？

「ああ・・・そんな顔しない、大丈夫また来るさ。」

「本当ですか！」

華琳ちゃんの顔がぱあつと輝く・・・が夏侯惇ちゃんがこちらを見ている。

「えと・・・さつき秋蘭ちゃんに会ったよ。姉がすいませんってね」

「うぐっ・・・秋蘭に会ったのか？それに真名まで・・・」

「うん、最後の笑顔が赤かったけど・・・あの子風邪でも引いてるの？口数も少なかったし。」

俺は二人に聞いてみる、今思えば夏侯淵ちゃんの様子は軽い風邪と言われても信じるかもしれない。

「・・・ぶつぶつ・・・まさか・・・秋蘭まで・・・？」ほそほそ

華琳ちゃんは少し悩む様になにかをつぶやいている。夏侯惇ちゃんは少し考えた後

「まあ、大丈夫だろう！なんせ私の妹だからな！」

開き直った。

「じゃあ、俺はそろそろ行くよ。またね華琳ちゃん、夏侯惇ちゃん」

「さて！私の真名も預ける！私は春蘭だ！」

「おお・・・いいのかい？・・・それじゃ俺は桜花だ。よろしくね？」

やっぱりかがんで目線を合わせて言う。

「お・・・おお・・・／／／」

やっぱり赤くなった。・・・なんだろう？華琳ちゃんから鋭い視線が・・・

なぜ俺が目線を合わせるかって？それは真名を交換するなら対等だ  
と思っっているからだよ。性別も年齢も関係なく対等な目線で関係を  
築きたいからだよ。

「それじゃ、またね。」

そうして俺は後の魏と呼ばれる地を出た。

・

・

・

しばらく歩き、華琳ちゃんと出会った場所らへんまで来た。

村はどこにあるか聞けばよかったと後悔する桜花君だったのだ・・・  
はあ・・・

「ん〜・・・それにしても・・・どこに行こうか。あと12年もあるし  
なあ・・・原作まで。取り合えず孫策ちゃんトコとか董に卓ちゃん各  
村に行ったりして過ごそうかな。」

さらに桜花は歩いていく。

「んん？なんだか物騒な雰囲気だな・・・」すっ

桜花の顔が少し険しくなる。すると進行方向から

わー!!!.....きゃあああ!!!.....があああ!!!

と叫び声が聞こえる。どうやら村が襲われているようだ。俺は出来るだけ急いで村へと駆けた。

.....

とある村

ある少女視点

くっ.....なぜ.....なぜこんなことに.....!!

私の村は今、賊達に襲われていた。多くの村人だ逃げていく中、仲の良かった友人やおじさん、おばさんが目の前で死んでいく。すでに私の顔はくしゃくしゃになっている。涙と恐怖心から来るからだの震えが止まらない。

「うっ.....ぐす.....」

私の父と母、兄が武の心得を持っていて、賊の討伐に当たっている。私はまだ幼く何もできない、よって家の中に押し込められた。





その声に気付いた賊が一件の民家に入っ  
て行く。だが黙って見ていら  
れるほど、桜花の心も穏やか  
ではなかった。

民家に近づいて中を見ると、  
賊が黒髪の少女の腕を掴んで  
下卑た顔で連れて行くこと  
としていた。

「いやっ！はなして！！」

「へへへ・・・大人しく来い！クソガキ！！」

そのやりとりで俺は中に入り込む。

「その子を離せ、このクズ野郎」

静かな声でそういった。

「ああ？なんだてめえ？まあ、  
いい野郎には興味ねえんだ！  
死んでくれや！！！！」

男はそう言って血がべっとりつ  
いた刃を振りおろしてくるが

その刃は届かずに、男の命が  
終わる。

男は、叫ぶこともできずに一瞬  
で絶命した。

桜花はただ、刀で斬り伏せた  
ただけなのに、男や少女は何  
をしたのか

分からなかった。

桜花は少女に近づき、優しく言った。

「もう大丈夫だ」

少女は、その顔に安心し両親や兄の事を思い出した。

悲しみて心が壊れそうになる、そんなとき自分を包み込む温もりがあった。

「悪かった・・もう少し・・早く来ていれば・・すまない、だから今はその悲しみは俺が受け止めよう。」

その言葉で少女は吹っ切れ、桜花の胸の中でただただ泣き叫んだ。

「うわあああああああああああああ!!!!!!!!!!!!!!」

桜花はその少女を泣きやむまで、抱きしめ続けた。

**夏侯惇登場、旅の始めと惨劇（後書き）**

最後の少女は、次回明らかになりますが、ヒントは黒髪、賊のトラウマ、未来の劉備軍の将です。

## 出会う関羽、決意する桜花（前書き）

ちなみに、この桜花君は魔法、魔術、超能力、過負荷・異常、忍術等は一部をのぞいて使えません。詳しくは主人公設定を次辺り書きます。

## 出会う関羽、決意する桜花

少女を落ち着かせた俺は、生き残っていた村人と村長の所へ案内してもらった。

そこで少女と俺と村長で少し話をしている。

「それで、この村の状況はどうなってる？」

「はあ・・・あまり芳しくありませんね・・・村人も約半数が死んでしまいました・・・」

「そう・・・ですか」

思ったよりこの村の状況はよくないようだ、賊は俺が全員倒したのて今は落ち着いているが、賊の本拠地にはまだ大勢の賊がいるだろう。そこを叩かない限り何度でも襲われるだろう。

「あ・・・」

考えていると少女が話しかけてくる。

「ん？なんだい？えと・・・」

そう言えば名前を聞いていなかったな。まあ、容姿から多少予想は着いているのだけだ。

「ああ、私は性を関、名を羽、字は雲長です。」

「そっか、じゃあ、関羽ちゃん？どうしたの？」

「はい・・・あの助けていただきありがとうございます／＼／＼」

「ん？・・・ああ、どういたしまして。怪我がなくてよかったですよ」ここに赤くなっている、まあ泣いているところを見られたのが恥ずかしいのだろう。

そう思いつつ、村長に話しをもどす。

「しかし、賊は拠点を構えているでしょう。そこを叩かない限りこれは何度でも繰り返されるでしょう。」

「ええ・・・それは分かっておりますが・・・いかんせん向こうの数が多くて・・・」

ん？・・・原作の時点で賊が勢力をつけ始めているのだが・・・既に勢力の多い賊もいるのか・・・

「どの程度です？」

「はい、約100名ほどの数です。」

「ふむ・・・では私が討伐してきましょう。」

「なっ・・・駄目ですよ！死んじゃいます！・・・！」

と、黙っていた関羽ちゃんが声をあげる。

「ああ・・・大丈夫だよ！関羽ちゃん。俺は強いから きっと君の村を守って見せるよ」

俺は、安心させるように笑顔で関羽ちゃんにそういった。

「……はい……でも、ちゃんと戻ってきてくださいね……？」

あ、泣きそうになってる。ヤバイ……それにしても……この子も  
一刀とおんなじ眼をしてる。うん……言い眼だ

「ああ、約束だ」

俺は親友とした約束をこの少女ともした。

「では、いいですか？村長殿？」

「え、ええ……いいのですか？」

「ええ、俺もここでちゃんとした決意を決めないと」

「決意……？……まあ、なんにせよお願いします。」

「はい、じゃあね関羽ちゃん。約束は守るよ」

そう言って俺は賊の討伐に向かう。

関羽視点

私は、不安だった。あの人まで死んでしまうのではないかと、しかし約束してくれた。必ず生きて戻ると。

だから私は信じて待つ。こんな時私の小さな手が恨めしかった、戦う力がないことが悔しかった。

だから私は、強くなるうと・・・決めた。

「村長・・・私は強くなりたいです・・・」

「それは・・・真か？本当にになりたいのか？」

村長がいつになく真剣に聞いてくる。

「はい！この村を、この国を！守れるくらいに！！」

「・・・分かった・・・お前の母より任された青龍偃月刀、今こそ渡そう。」

村長は私に母上から私に渡すように言われていたという青龍偃月刀を渡してくれた。

私はこれと共に強くなることを母に父に兄に、何より自分に誓った。





圧倒的な武力によって蹂躪される

人が吹き飛んでいく。桜花の一振りです人ほどがいつぺんに死んでいく。  
ただ繰り返される破壊の一撃。誰ひとり桜花を止める事が出来ずに恐怖した。

そして約半刻で、賊は壊滅した。

「・・・人を殺すのは、まだ慣れないな・・・いや慣れてはいけ  
ない・・・さて村へ戻ろう。」

俺は村へ向かって歩き出す、背後には100人の墓が作られていた。そしてしばらく歩くと村へ着く。入口には関羽ちゃんが原作で使用していた青龍偃月刀を持ってたたずんでいた。

「・・・やあ、関羽ちゃん。その様子だと・・・やっぱり？」

俺は関羽ちゃんがこうなるだろうと思っていた。強くなりたいと思うのだろうと。

「はい、私はこの手で大切なものを守れるようになります。」

「そう・・・頑張ってるね」「ニコリ

「は・・・はい！！！！／／／／」

「そ、それですね！！貴方に、わわ私の真名を預かってもらえませんかかか！！？」

「落ち着け。真名ね・・・いいよ、俺の真名は桜花。よろしくな」

「は、はい！！私は愛紗です！！！！」

ちなみに、この愛紗ちゃんは現在7歳である。いい？身長的には俺の腰上あたりに頭があるからね？

原作の愛紗ちゃんをイメージしないでね？後々困るから。

で、そんなこんなで村長のもとへ報告するとしばらく居てくれないか？と頼まれた。

まあ、時間もあるから1、2年ほどなら良いと言ってこの村に住まわせてもらうことになった。

「はあ、でも住居どうしよじょ・・・」

「あ、桜花さん！」

「んん？愛紗ちゃん？どうしたの？」

「よければ私のうちに来ませんか！？」

「んん？いいの？」

「はい！そ、それで代わりと言ってはなんですけど・・・私を・・・鍛えてくれませんか！？」

「いいよ。1、2年間だけどよろしくね？」

「はい！..！」

そうして、愛紗ちゃんとの暮らしが始まった。

「はっ！今桜花さんに女の気配がしたような・・・！」

「華琳様！私もしました！」

「春蘭も？・・・今度来たら問い詰めないと・・・」

「仕事してくれよ」

「「「つるさいぞ」」」

「はあ・・・桜花、結構つらいぜ・・・」の暮らして

出会う関羽、決意する桜花（後書き）

では、次は恋姫での主人公設定です

旅立ち、そして次の出会い。(前書き)

はい、今回は2年後から始まります。

旅立ち、そして次の出会い。

どうも、桜花です。前回から2年経ちました。

え〜・・・中身は割愛ってことで。ちよっ・・・ごめん！石をぶつけな  
いで！・・・まて！その剣は伝説のエクスギゃあああ！！

はい・・・少しだけなら紹介します。

まず、愛紗ちゃんと修業しました。

原作に一步どかないくらいの強さに見えました、この分だと原作  
時には原作通りの強さになってるでしょう。

次に、愛紗ちゃんと添い寝した。まて！その構えた岩を捨てる！！

とまあ、こんな感じで過ごしてたら。懐かれました。ええそりやも  
う懐かれましたよ。

どれくらいかって言うと。

「行かないで！！言っちゃいやだー！！！」

と号泣しながら村長に取り押さえられて叫んでるくらいに。

「どうしたのかねえ・・・」

はあ、なんとも・・・教育を間違えたか？

「愛紗ちゃん、大丈夫。また会えるから。」

「ぐすっ！・・・で、でもおー！！！」



ちなみに愛紗ちゃん、現在9歳。小学三年生と同じ年齢です。

「それじゃ、愛紗ちゃんがもう少し大きくなったらまた会いに来るよ。約束だ」

「ほ、本当!!?分かった!それじゃ私我慢する!!」

なんとかなったよ。すげえなおい。

「それじゃあ、またね。お世話になりました村長。」

「はは・・・また来なされ。歓迎しよう。」

そう言って俺は村を出た。

で、出たのはいいんだけど。次は何処へ行こうか・・・

「うん・・・路銀も残り少ないしな・・・うん、進んでればどこかしらにつくだろう。」

としばらく能天気歩いていたら。何やら騒がしい村に着いた。村に入ると、ある家の周りに人が大勢集まっている。

「なんだろ・・・むぐむぐ・・・行ってみようかな？」

と持っていた団子を食べ終えつつ近づいてみる。で、近くの村人に問いかけた。

「あの、旅のものなんですけど。これは一体・・・？」

「ああ・・・今ねこの家に・・・まあ、お年を召したおじいさんと孫娘みたいな子が住んでいたんだけどね？」

「はい」

「実は、そのおじいさんが病でなくなってさあ。それで親戚連中が集まってまだ幼い孫娘を誰が預かるかってもめてんだよ。」

「誰も名乗り出ないのでですか？」

気になってそういった。幼い娘一人くらいなら何の問題も無いはずだ。

「それが、この村は貧相でね。一人養うのも苦労するし、なにより何も分からない女の子預かるのもちよっとねえ・・・」

「そういうことですか。」

少しだけ、可愛そうに思えてくる。性格のせいかな放っておけないよ

うだ。  
つくづく甘いな、俺も。

「じゃ、俺が預かってもいいですよね？」

「え？・・・まあ、いいんじゃないかい？」

「ですか、じゃ失礼しまーす」

俺は人をどけながら中心に入っていく。

抜けた先には悲しい顔で俯いてる少女とまあ・・・村長的な人がいた。

「すいまつせーん。」

「なんじゃ？」

「その子誰も預かろうとしないんですよ？」

「・・・ああ、そうじゃな。残念じゃが。」

「じゃ、俺が預かってよろしいですか？」

「なっ・・・お前さん何者じゃ？」

「俺は旅のものです。一人で旅するのもそろそろ飽きたんでね。」

村長は俺の眼をじつと見る。しばらく見ていると村長はにこりと笑い

「うむ、悪いものではないようじゃな。分かったこの子はお主に預かってもらおう。泣かせたり、酷い目に合わせたら・・・ただではお

かんぞ・・・？」

最後の方は物凄く真剣な思いが伝わってきた。うん、良い人だ。

「もちろんです。」

だから俺も真剣に返す。

「じゃあ、皆さん。この話はお終い！帰っていいですよ。」

すると村人たちは早々に散らばって帰って行った。

「さて」

俺は少女に近づく、見てみると青紫というか青というかそんな色の髪をしている。頭には魔女の被ってるようなマジカルハットがあった。・・・てかこの子あの子じゃね？

「え〜と・・・君の名前は？」

「あう・・・ほ、ほーとーでしゅ・・・噛んじゃった・・・／＼／＼」

可愛いねえ。が、まさかあの鳳統ちゃんだとは・・・あれ？でも帽子にリボンが付いてないな・・・？

「そっか。鳳統ちゃんか。俺は風華、これから君の家族になる。よろしくね？」

「は・・・はい・・・」

「でだ、聞いての通り。俺は旅人だ、だから君にも一緒にこの村を出てもらいたんだけど・・・いいかな？」

少し、心配だが出てもらうよりほかにない。

「は、はい！少し待っててもらえましゅか！？じじじ準備してきましゅ・・・！」

と言い残して家の中に入って行ってしまった。噛み噛みだよ・・・こんな幼いころからなんだね。

そして、しばらくして家から出てきた鳳統ちゃんと村をでた。

・

・

・

「さて・・・鳳統ちゃん。俺はどこに向かうとか決めてないんだけど、どっちに行きたい？」

俺は無茶ぶりをしてみた。

「あわわ・・・えと私が決めても・・・いいんでしゅか・・・？」

「うん、いいよ。それに家族なんだから敬語は使わなくてもいいんだよ？」

「あ、うん・・・！／／／」

鳳統ちゃんが嬉しそうににっこり笑う。俺もつられて笑顔になった。

「それじゃあ、家族として真名を預けとこう。俺は桜花、よろしくね？」

やっぱり目線を合わせて笑顔で言った。

「わ、わたしは・・・雛里です！／／／／」

「うん、よろしくね雛里ちゃん」

顔が赤いのは村からそうだけど、さらに赤くなったね・・・

で、まあしばらく雛里ちゃんの勘を頼りに歩いていると、なんと村に着いた！

凄いよ雛里ちゃん！！

「いや・・・凄いね雛里ちゃんの勘は・・・」

「えへへ・・・」

「それじゃ、少し休憩しようか。」

「うん！」

歩いているうちに慣れたのか、余り会話中に嘔まなくなったね。とつても嬉しそうに笑う雛里ちゃん。

「あ、そこに茶屋があるね。団子でも食べて今後を考えようか」

「うん！・・・あれ？」

「どうした？雛里ちゃん？」

「いや・・・あそこになにかひとだかりが・・・？」

「あゝ？あれか、いつてみる？」

そう聞くと、茶屋と人だかりを交互に見る雛里ちゃん。ははは、微笑ましいね

「茶屋は後でも行けるさ、行ってみようか」

「あう・・・うん・・・」

そして人だかりに近づくと、そこには喧嘩をしている大人がいた。

「・・・茶屋にいこっか雛里ちゃん・・・」

「うん・・・」

そう言っつて茶屋に戻り、団子を食べながらまったりと過ごした。  
そうそう、その途中で次は孫堅さんの領地に遊びに行こうってこと  
になった。

まあ、雛里ちゃんも一度は行って見たかったようですぐに決まった  
けどね。



旅立ち、そして次の出会い。(後書き)

おおっと・・・雛里ちゃん登場です。ま、親戚中をたらいまわしにされる前に回収してみました。・・・あれ？たしか孔明ちゃんもそんな感じじゃなかったっけ・・・？

## 主人公紹介（前書き）

忘れていた主人公紹介・・・  
ど、どつぞー！！

## 主人公紹介

### 風華桜花の恋姫における主人公紹介

・性 風 名 華 字 衝 真名 桜花

ちなみに名字の所はかぜはなと読みます。ふうかと読んでいた方、  
分かりにくくてすみません(焦)

### ステータス

身体能力最強化、あらゆる力を操る程度の能力は健在

しかし、この世界においてはどうということかナルトやブリーチ、め  
だかボックスで得た力が使用不可能になってます。

(作者のせいです。だってこの世界で斬魄刀の力とか忍術とか異常・  
過負荷使えたらだれも勝てないでしょう?)

しかし、能力は持たないが斬魄刀自体は使えます。例にするなら月  
牙天衝とか使えない斬月、凍らせることが出来ない氷輪丸。みたい  
なね?

あと戯言シリーズで得た曲弦糸、音使い、ナイフ使いは魔法とかで  
ない単なる技術なのでもちろん使えます。

先程、書いた能力使用不可ですが。使用できる異常・過負荷が少しあることにします。  
しかし相手にダメージを負わせる技は無理です。回復系も大嘘憑きほどのものはありません。精々、傷を塞ぐ程度。つまりは応急措置です。

まとめると

身体能力チート

あらゆる力を操る程度の能力

神様から貰った女の子に多少の縁がある加護

曲弦系・音使い 使用可能

10個ほどの異常・過負荷 使用可能ただし攻撃系統、因果律・常識を覆すほどの者は無理。

能力を持たない武器として使用できる斬魄刀

が使えるのが恋姫での桜花君です。

では次から本編です。

主人公紹介（後書き）

失礼しました・・・（汗）

雜里と桜花の旅・・・1（前書き）

今回からこのタイトルでしばらく続けたい。

## 雛里と桜花の旅・・・1

どうも、桜花です。

今、雛里ちゃんと旅してます。この前の茶屋の村から出て一ヶ月。色々な村を転々と旅して、今は呉に向かう途中で、洛陽に着いたよ！なんかさつき元の世界で見た赤と青のジャージ姿のキャラクターを見たんだけど・・・聖徳太子と三国志って時代違うよね？

「うゝむ・・・」

そう考えていたら

「あの・・・桜花さん？」

「え？」

雛里ちゃんが心配そうに話しかけてきた。まあ、細かいことは気にしない方がいいよね！

「大丈夫だよ。少し気になったことがあったただけだから。」

「そうなの・・・？」

この一ヶ月で雛里ちゃんかなり俺の事に慣れたみたいで俺との会話だけならもう全く噛むことがないです。すこしだけあの噛んでいた時期が懐かしい。でも・・・なぜかときどき赤くなるんだよね、会話中に・・・なんでだろう？



「よし、じゃあ今回はここで少し休もうか。」

「うん！・・・でも、私達宿を取る路銀がないよ？どうするの・・・？」

「うーんそうなんだよなあ・・・」

そう、相も変わらず俺達にはお金がない。持ち物と言えば、俺は武器や衣服くらい離里ちゃんの家に入った本や筆記具、着替え、勉強道具くらい。今思ったけど離里ちゃんって有名な軍師になるんだよね。勉強が凄い出来るんだよこの子。

「あの・・・それならこの領主さんに客将として雇ってもらえば良いんじゃないでしょうか？」

「ああ・・・そうすれば衣食住くらいは確保できるね！良い案だよ、そうしようか。」

まあ、ここは将来董卓ちゃんが治める土地になるだろうし、過去の事は知らないけど多分董卓ちゃんの母親か父親が納めているんだろうね。

「じゃ、行こっか。離里ちゃん」

「はい！」

そう言って、俺の手を繋ぐ離里ちゃん。なんだか最近手をつなぐようになったなあ・・・まあ良いけど。

そう言って城へ手を繋ぎながら歩いていく俺達。

で、着いた。  
門番さんに言つて領主さんに客将になりたい旨を伝えてもらう。  
しばらく待っている、領主さんかな？が出てくる。いいのかそれ  
で・・・

「貴方が、此処に客将として雇つてもらいたいと言つる者かしら？」

「ええ、それとこの子も・・・文官として役に立つでしょう。」

「そう、なら少し試させてもらつてよ？」

「ええ、どうぞ。それとお名前を聞かせてもらつても？」

なんかこの人、董卓ちゃんに似てる。やっぱり母親かな？

「ええ、良いわよ。私は董君雅、この地を治める領主よ。」

やっぱり、董卓の父だったこの人も女なのか・・・

「そうですね、俺は風華です。こっちは鳳統、よろしく願いしま  
す。」

「よろしく・・・おながいしましゅ・・・／＼／」

やっぱり俺以外だところなるんだな。雛里ちゃんや。

「それで、試すとは？」

「ええ、貴方の武を見せてもらうわ。」

「つまり手合わせをして見せると」

「そうよ、貴方はあとで文官の試験を受けてもらうわ。いいわね？」

「あわわ・・・は、はい！」

やっぱり、客将としての試験てのはこうなるんだね。小説とかでもよく見てたけど。

「で、誰とやねば？」

「あたしよ」

「・・・もう一度聞きますけど誰とやねば？」

「あたしよ」

「あんた仮にも領主だろう？いいのかそんなことして・・・」

雛里ちゃんも唾然としてるよこれ。

「いいのよ、さーやるわよ！ーっいてらっしやい！ー！」

「はあ……」

董卓ちゃんの性格はこの人がいたからか・納得だよ。

・

・

・

〈中庭〉

「さて、と……準備はいいかしら？風華？」

「っと、良いですよ。雛里ちゃんそこで見てて。」

「うん……大丈夫なの……？」

雛里ちゃんが不安そうにしている。まあ……俺が戦ってるのなんて見せたことないからなあ……

「大丈夫、俺は負けないよ。」

「……うん」

若干まだ不安そうだが、納得してくれたようで雛里ちゃんが離れていく。

「じゃ、始めましょうか」

俺は白と黒の双刀を構える。

「ええ、最近動いてないから思いつきり行くわよ？」

董君雅さんがかなり大きな偃月刀を構える。

そして審判が両者を見て一置き・・・そして

「始め!!」

開始の合図を叫んだ。

三者視点

最初に動いたのは董君雅、偃月刀を下段に構え斜めの体制で突っ込んでくる。

「ぶっ!!」

下段の偃月刀を振り上げるようにして桜花に放つ

ギャリイ!

それを桜花は刀に滑らせるようにして受け流しもう片方の黒刀で切りつける。

が、それを董君雅は振り上げた勢いを利用して後ろに下がりがわす。

「やるじゃない。風華」

「いえ、そんなことはないですよ」

互いにそんな言葉を交わす・・・が、次に動いたのは桜花。

董君雅の目の前から消えた。

「なっ・・・!!?!?上!?!?」

「おお!!!」

「おおおお!!?!?」

ギイン!!!

振り下ろされる白刀を偃月刀でなんとか受け止めるが、その瞬間桜花は白刀を手放す。

「うえっ!?!?」

いきなり手ごたえの無くなった董君雅はびっくりして少しだけ動き

を止める。

「隙あります、董君雅さん」

その隙を見逃さず、桜花は着地と同時に董白の首元に黒刀を突き付ける。

董君雅は偃月刀を上に掲げた万歳の様な姿勢だ。どう見ても完全な敗北。

「負けた・・・か。強いね風華。」

「いえ、単に董君雅さんより強かっただけです。俺より強い人は多分一杯いますよ。」

・・・それはこの世界に居るのか・・・？by作者

とはいえ、桜花君は董君雅さんに勝ち見事客将になった。

ちなみに雛里ちゃんも試験に無事合格。その時軍師が泣いていたとか。

聞くところによるとその軍師が「9歳の少女に負けた・・・うつつうわあああ！！」と言って走り去って行ったとのこと。

「さて、と雛離ちゃん。無事に合格出来たみたいだね。おめでとう」

「うん！お、桜花さんも・そのかつこよかった・！／／／／」

「ははは、ありがとう。」

そんな会話を俺と雛里ちゃんがしていると、影から俺達を見る視線に気づいた。

「ん？」

「えっ？どうしたの？」

「いや・・そこに隠れてる子がいてね。どうしたの？出ておいで〜」

すると柱の後ろに隠れていた子供が出てくる。「こ、この子は……!?!?!?」

「あ、あの……」

「んん?・・きみってまさか董君雅さんの娘さん……?」



そう出てきたのは幼いころの董卓ちゃん。可愛いよ、具体的に言うと雛里ちゃんとおんなじくらい。

「へう・・・はい、と、董卓といいます・・・!」

「へえ・・・で、どうしたの？迷子？」

「ま、迷子じゃないです・・・!」

まあ、自分の家だもんね。迷うわけないよ

「桜花さん・・・自分の家で迷子はないと思う。」

雛里ちゃんに言われちゃった・・・

「うん・・・まあ、分かってたよ。で、どうしたの？」

「え、いや・・・お母様に新しい客将の人が入ったって聞いたから・・・」

「ああ、見に来たのか。どんな人かな」と

「は・・・はい／＼／／」

ははは、董白さんは大胆すぎるからなぐだから董卓ちゃんがこんな大人しい性格になったんだよ・・・全く。かわいいけどね!

「ははは、で？どうだった？観た感想は」

「へう・・・や、優しそうだなぐって・・・」

「・・・」

な、なんか雛里ちゃんの視線が怖いんだけど。なんで？

「そ、そっか。ありがとう。あ、こっちは鳳統ちゃん。君と同じ年くらいかな？仲良くしてあげてね？」

「は、はい！えと・・・董卓です！」

「あ、うん・・・ほ、鳳統でしゅ！」

雛里ちゃんの視線が外れた。それとまた囁んだね。同い年でもダメなのか。

まあ、なににせよ雛里ちゃんにも友達が出来るのはいいことだよ。うっん・・・でもそろそろ雛里ちゃんを水鏡塾に入れた方がいいかな・・・？

「迷うところだね・・・」

雛里ちゃんと董卓ちゃんが後ろの方で仲良さげに話してる中でそう考える桜花君であった。

雜里と桜花の旅・・・1（後書き）

洛陽では、2、3話くらい滞在します。

雜里と桜花の旅・・・2（前書き）

洛陽の一日。

## 雛里と桜花の旅・・・2

桜花です。現在は洛陽に滞在しています。  
客将として雇ってもらって一晩が開けました。

「ん〜・あ、おはよう雛里ちゃん。昨日はよく眠れたかな？」

「あ、桜花さん。はい！昨日は月ちゃんと一緒に夜遅くまで話しちゃいました！えへへ」

「あ、真名まで交換したんだ。仲が良いようでよかったよ。」

「ふあ〜・んにゅ・・・？」

そんな話をしていると寝ぼけた董卓ちゃんが出てきた。

意識が半覚醒状態だからか容姿が崩れている。

綺麗な髪は所々寝ぐせが付いており寝巻き？なのか着ている服は崩れて、右側の肩や鎖骨が見えている。

「ははは・・・董卓ちゃんは雛里ちゃんほどしっかり起きれなかったみたいだね？」

「あわわ・・・月ちゃん！ほらこっち来て！！」

そう言ってあわてた雛里ちゃんが部屋の中に董卓ちゃんを連れていった。

「うっん・・・え？雛里ちゃんー！！？」

ボタンー！！

うん、しばらくかかりそうだね。じゃあ・・・領主さんの所でも行きますか。

・

・

・

で、着いた王座の間。董卓ちゃんのお母さんが軍師の方と話している。

あ、こっちに気付いた。あれれ？軍師さんが行っちゃったぞ？

「おう、風華。起きたか。」

「はい。あ、そうだ桜花でいいですよ？一応今は仕える身ですし、真名を預けます。」

「お、そうか・・・じゃあ、私のも預けよう昨日のお前の武は素晴らしかったからな！」

おお、なんか光栄だね。

「我が真名は陽ひな。お前にこの真名を預けよう！」

「ありがとうございます」

こうして俺と陽ちゃんは真名を交換したのだった。

・

・

・

しばらく陽ちゃんと話していると・・・なに？なんでちゃん付けか？そりゃ俺が年上だからだよ。だっておれ600歳超えてんだぜ？まあ、話してたら雛里ちゃんと董卓ちゃんが来た。

「す、すみません！遅れました！」

「大丈夫だよ、雛里ちゃん。まだ忙しい時間帯でもないし。董卓ちゃんもおはよう」

「へう・・・おはようございます・・・／／／／／」

朝の事が恥ずかしかったらしく、顔を真っ赤にして俯いた。

「さて、では仕事してもらおうぞ。桜花、鳳統。桜花は街の警邏。鳳統は軍師達と共に文官の仕事してもらおう。」

「はい」

「は、はい！」

早速仕事を貰った。いろいろ仕事の説明を受けた後、俺と雛里ちゃんの仕事に向かった。

「じゃあ、頑張ってるね？雛里ちゃん。」

「う、うん！頑張る！」

・

・

・

街

「警邏つて言っても・・・暇だな・・・」

俺は城を出た後街に来ていた。あの領主の性格のせいか・・・賑やかだな。皆楽しそうにしている。こつこつという街は凄く好きだ。

・・・そう言えば、天の御使いの一刀はどうなったんだろう・・・？



ま、生きていればまた会えるさ。  
一応、あいつには俺の能力で一つだけ呪い？みたいなのをかけてあるし。

「さて・・・街の入り口に来ちまった・・・」

この洛陽は街は賑やかだがそれほど広いわけではない。おおよそ半徑500mほどの土地だ。城は入口の方に近く建てられているから入口には300mほど歩けば着いてしまう。

「・・・戻るかな。「!!!!」ん？」

振り向いて城へと向かおうとした時何か声が聞こえた。気になったのでそちらへ向かう外の林の中に入って行くと

「ちょっと・・・はな・・・離しなさいよ!!」

「だまれ！おらこつちへ来い!!」

「へへへ、こいつは上玉だぜ・・・」

二人のガラの悪い男と一人の少女・・・てかあれは・・・賈馱ちゃんじゃないか！

「なんでみらいの董卓軍の名軍師がこんな・・・」

「!?!?だれだ!?!?」

ヤバいばれた。

「ばれちゃったら仕方ないよね〜・・・」

草木がさがさとかきわけて出ていく。男はこっちを向いて表情を荒げている。

「さて・・・やってることは分かるよな？」

「くっ・・・はん！だがお前をやっちまえば関係ねえよな！！」「ごお！

そう叫んで二人の男は飛び込んできた。

「きゃあああ！！！」

賈駆ちゃんが叫んで目を手で覆う

「ふっ・・・」

俺は歩いて賈駆ちゃんの元へ行く。

「大丈夫かい？」

「え・・・？なんで・・・？」

後ろへ流された男達を見る賈駆ちゃん。しかし二人は気絶してした。

「嘘・・・どうやって・・・」

「まあ、疑問はいろいろあるだろうけど、今は・・・怪我はない？」

「え？っ、うん・・・」

そして賈馱ちゃんの手をとり城へと戻った。

・  
・  
・

### 賈馱視点

私は、村を出て旅をしていた。10歳で旅に出るのは危険と言われたが、意見を押し通して拳句の果てには夜逃げのように村を出た。

その後私は2週間ほど情報収集を行い、洛陽は善政が行われていると聞き洛陽までやってきた。

それなのに門の前にいた男二人が私をみて下賤な眼をして寄ってきた。

「へへ、姉ちゃん。良い体してんじゃねえか・・・」

「ちよつと付き合ってくれよ・・・」

私は強いわけでもない、どちらかと言えば知に秀でる方だ。だから私は強引に林に連れ込まれた。

「ちよつと！何すんのよ！！」

「良いからこつちへ来い！」

ぐい！と腕を引つ張られた。

「ちょっと・・・はな・・・離しなさいよ！！」

「だまれ！おらこつちへ来い！！」

「へへへ、こいつは上玉だぜ・・・」

すると草むらから男の人の声が聞こえた。

二人はそつちの方を向いて

「だれだ！？」

そう問いかける男の一人。

「ばれちゃつたら仕方ないよね・・・」

・・・なんかかなり陽気な人だ

でも、その後の事はよくわからなかった。男たちが襲いかかったが分かったのはそこまで

次には

「大丈夫かい？」

その声を掛けられていた。

桜花視点

そのまま賈馱ちゃんを連れて城に戻ってきてしまった・・・どうしよう

「あのー・・・君、頭いい方？」

「え？た、多分」

わお頭いいって言うっちゃうんだ

「じゃ、ここに仕えてもらっていいかな？」

「・・・此処の主に寄ります。」

さっきから気になってなけど・・・賈馱ちゃんってこんな口調だった  
っけ？もつと砕けたツンデレ口調だったような・・・

「ま、いいか・・・それはさておきさっきは危なかったね。怪我はな  
いかい？」

「えー！あ、はい！さっきはありがとうございます！」



「あ、アンタ！さっき助けてくれたからお礼に・・・わ、私の真名を預けてあげる！私は詠よ！」

「え！？いきなりだね！・・・うん、俺は桜花だよ。これからよろしくね詠ちゃん」

「よよよろしくしてあげなくもないけど！！？／／／／／」

そのあと小さいときはツンデレもデレの方が大きかったんだなと感じていたら雛里ちゃんと董卓ちゃんに睨まれました。  
なんで？董卓ちゃんも？なんで？

離里と桜花の旅・・・2（後書き）

次は離里の日常です。



### 雛里と桜花の旅・・・3

どうも、私は鳳統です。真名は雛里。

今私は、洛陽で陽さんの・・・あ、陽さんとは真名を交換しました。それで、陽さんの城で仕事をしています。

私と一緒に旅をしてる桜花さんは客将として街の警邏をしています。あんまり会えなくて少しさびしいです。

「まったく・・・桜花さんは・・・」

「雛離？どうしたのよ？」

私に話しかけてきたのは先日桜花さんが連れてきた女の子、名前は詠ちゃん。今ではこの城で働くお友達です！

「いえ、なんでもないです・・・」

私の考えていたことは、その詠ちゃんの事。桜花さんが連れてきたことに少しだけ嫉妬しちゃってるんだと思う・・・

「ふふ・・・雛離ちゃんは桜花さんが詠ちゃんを連れてきたことに嫉妬してるんだよ」

「あわわ！ゆ、月ちゃん！..!」

月ちゃんがいきなりそんなことを言うものだからあわてて声を上げたけど、詠ちゃんはすこし納得いかないような感じで笑ってた。

「へえ・・・雛里はアイツとはどんな関係なの？」

「え!?!どどどんって!べべ別になんにも・・・/ / / /」

「へう・・詠ちゃん大胆なの・・」

「・・桜花さんは・・大切な・・家族です・・・/ / / / /」

私は恥ずかしながらもそう言った。私のたった一人の家族。そして私が大好きになった人。

それが兄であり想い人、桜花さん。私が兄と呼ばないで桜花さんと呼ぶのは、兄妹だと結婚出来ないと知っているからだ。

「ふ〜ん・・で、月はどうなのよ?」

にやにやしながら標的を月ちゃんに変更する詠ちゃん、正直助かったな・・

「ええ!?!いや・・べつに!私はその・・!!!・・・へう・・・/ / / /」

「顔が真っ赤よ月」

「むう・・そういう詠ちゃんはどのなの!?!」

にやにやしてる詠ちゃんに月ちゃんが反撃する。すると詠ちゃんはあわてて言った

「わ、私はべつにあんな奴・・好きじゃないわよ! / / / / /」

「「「「「」」」」」

ぷいっと顔をそむけながら顔を真っ赤にして言う詠ちゃん・・・はあ、  
相手が多いなあ・・・

「・・・詠ちゃん、月ちゃん。」

「なんですか？」

「なに？」

「負けないからね！」

そう言うと、二人はニコリと笑って言った

「「当たり前よ（）です（）！」」「

月視点

私は今、城の中を歩いている。隣には先刻雛里ちゃん達と話した人物。桜花さんがいる。

桜花さんは詠ちゃんを連れてきた日の夜に私に真名を預けてくれた。私も桜花さんに真名を預けている。

「ねえ、月ちゃん。」

ふいに桜花さんから声がかかった。

「なんですか？桜花さん」

「月ちゃんはこの世の中をどう思う？」

なぜ、そんなことを聞くのか分からなかった・・・でも

「私は・・・酷い世の中だと思います。」

「どうして？」

「今、私達はこうして暮らしているけど・・・その裏ではなにも食べられずに飢えて死んでしまう人や賊になって殺される人が大勢います・・・だからです。私は・・・そんな人達を笑顔に変えられたらどんなに素敵なことだろうって思います。」

私は常日頃から思っていた。戦の度に怪我を負う兵士さん達、包帯が増えていく母、涙をこぼす家族を見て来たから。私はまだ幼い10歳の少女だから、何もできないことに少しだけ胸を痛める。

「そっか・・・」

桜花さんはそんな心を感じてくれたみたいに戻す。

「それなら月ちゃん是谁よりも優しいんだね。うん、きっとこの洛陽はもつと良い国になるよ。俺が保障する」

「・・・」

桜花さんは笑った、私はその笑顔に見とれた。背後に浮かぶ月が桜花さんを照らしていた桜花さんの姿を輝かせた。そんな桜花さんはとても・・・綺麗だった。

「../../../../..あ、ありがとうございます・・・」

「?」

顔が真っ赤になる、恥ずかしくて少しだけ前に出て顔をそむける。

「・・・桜花さん」

「なんだい?」

「私は・・・この国を・・・私のこの手が届く全ての人を笑顔に変えて見せます!」

「・・・そっか、応援するよ」

私達は互いに微笑んでいた。綺麗な夜空に浮かぶ月の下で・

・

・

・

翌日

「陽ちゃん」

そんな言葉を投げかける桜花さん。雛里ちゃんも首をかしげている

「なんだ？桜花。どうかしたか？」

お母さんも疑問なのかそう返した

「そろそろ、この町を出ようと思います。」

「」「」「えっ!?!」「」「」

私とお母さん、詠ちゃんに雛里ちゃんもそんな声を上げた。

「ちょ、ちょっと待て。急すぎないか?」

「そうですね!もう少し此処に居ても・・・」

私とお母さんは、引きとめた。

「ははは・・・いや此処に居る事はそれはそれでよさそうなんですけど・・・ここにきてもう一ヶ月経ちましたし・・・まだまだ旅も続けたいので」

「そうか・・・さびしくなるな」

お母さんはさびしそうにしている。桜花さんとお母さんは度々、時間を見つけては手合わせをしていたから余計にさびしいのだと思う。もちろん私も寂しい。詠ちゃんだって引きとめたそうにしてるけど抑えてる。

「・・・はあ」

桜花さんは少し息を吐いてこう言った

「そんなに寂しそうにしない。また会いに来るよ、きっとね」

「ほんとうですか？」

「そうだね・・月ちゃんや詠ちゃんがもう少し大きくなったらまた会いに来よう。」

桜花さんはカラカラと笑って私と詠ちゃんの頭を撫でた。

「ん・・／／／」

「へう・・／／／／」

こんな風に撫でてもらうことは結構あるけれど、実はかなり気持ちがいい。

「・・分かった、では送迎の宴をしよう!」

お母さんがそう言った。

「いいんですか？」

「ああ!短い間とはいえお前もまた私たちの仲間だ!ならば相應の宴を持つてしかるべきだろう!」

お母さんはそう言うたびゆ　と駆けて言って、宴の準備をしろ!と奥で騒いでいる。

「・・雛里ちゃんもゴメンね?急に決めちゃって・・残りたければ残ってもいいんだよ?無理して付いてこなくてもいいんだし・・」

「いや、私は桜花さんについていくよ!家族なんだから!」



そんな会話をしている桜花さんと雛里ちゃん  
すこしだけそんな関係がうらやましかった。

夜

桜花視点

その日は凄い盛り上がりを見せた。街の住民や兵士も参加した国を  
挙げての大きな宴。

月ちゃんは笑顔で見ている、その隣では詠ちゃんが不機嫌そうにお  
酒を飲む。

雛里ちゃんは顔を真っ赤にして目をまわす。陽ちゃんは高らかに笑  
いながらお酒をがぶ飲みした。

そして、皆が眠り静かになった。とても楽しい一日だった。そして俺は雛里ちゃんを起こす。

「雛里ちゃん。起きて」

「ん・んう・んう・んう？桜花さん・ふあ・ん」

「うんそうだよ。そろそろ洛陽を出るよ。歩ける？」

俺は雛里ちゃんにそう問いかけ、手を引く

「うん・んう・んう・んう・んう」

まだ少しだけ顔が青白い。見ると詠ちゃんも顔を青くしてうなされながら倒れている。やっぱり10歳の体でお酒を飲むのはいくら無礼講でもやめさせた方がよかったかな？

「行っちゃうのかい？」

そんな考えをしていると、後ろからすこし寂しそうな笑顔でこちらを見る陽ちゃんがいた。

「・・・まあ、少し寂しいですがね？」

「そうかい・・・ふふふ、まあいつでもおいで。歓迎するよ」

「ありがとございます。じゃあね陽ちゃん」

「ああ」

そう言って俺達は洛陽を出た・・・

雜里と桜花の旅・・・3（後書き）

次回はメンマ好きのあの人（幼女期）が登場！

雜里と桜花の旅・・・4 (前書き)

今回は少し短いです。

## 雛里と桜花の旅・・・4

「・・・大丈夫かい？雛里ちゃん・・・」

「うぶ・・・ちょっと・・・キツイかも・・・」

どうも、桜花です。前回洛陽をでて数時間、呉に向けてさらなる旅を続けているところです。

しかし、どうも二日酔いは思ったよりきついものみたくて雛里ちゃんは蒼白い顔で口を抑えています。

「うーん・・・じゃ少し休もうか」

「うめんね・・・桜花さん」

雛里ちゃんが謝る。気にしないでもいいのになあ

「よつこいしょっと。ほら寝っ転がって。」

草むらに座り、雛里ちゃんを膝枕で寝かせる。

「うづう・・・」

雛里ちゃんは限界だったのか、そのまま気絶してしまった。

「ははは・・・さて・・・俺も少し休むかな。」

そうつぶやいて俺も目を瞑る。

・・・すぐそばに村があるよと聞いてみれば。

・

・

・

「なにこれ？」

「ううん・・・」

「すーすー・・・」

お分かりでしょうか？一人多いのです。なぜなら今の状況は木にもたれかかっている俺、その俺の膝を枕に寝転がる雛里ちゃん。そして、俺の隣で同じく木にもたれて寝ている水色の髪のナーズ服の様な服を着た少女

「こいつって・・・趙雲じゃん」

「すーすー・・・」

そう俺の隣でいつの間にもやら寝ていた少女の名前は趙雲。原作キャラの一人にして雛里ちゃんの未来の仲間になる人物。

「・・・んん？おや、起きましたかな？」

「いや起きたのは君だけだ」

「ふふふ、いやなに私の村の近くで人が寝ているものだから気になりました、いつの間にか一緒に寝てしまったようです」

このからかうような口調はこの年にはなっていたんだ。まだ11歳くらいなのにねえ

「そうみたいだね。おい雛里ちゃん、起きて」

「うっ？桜花さん？」

「そつだよ桜花さんだよ。顔色はよくなってるね、じゃあ行くところ？」

雛里ちゃんにそつ言う

「あ、うん！ってあれ？桜花さんその人は？」

「ああ、私の名前は趙雲と言います。以後よろしくお願いします。」

「そつか趙雲ちゃんか。俺は風華、こっちは鳳統ちゃんよろしくね」



「よ、よろしくでしゅ！／＼／＼」

うん．．．もう少し俺以外の人にも慣れてほしいところだな．．．

・

・

・

しばらく歩くと、趙雲の村に着いた。

なんでも、賊が発生しているせいでかなり貧しいらしい。愛紗ちゃんの所と似たようなものかな

「それじゃ、趙雲ちゃんはなんであんなところに？」

「いえ、数人の賊が出たのでちょっと退治にいったのです。その帰りに風華殿達と」

「そっか．．．なんなら俺が賊の基地を強襲して追い払ってやるうか？」

俺はなんのけもなしにそう言う

「．．．よいのですか？しかし．．．風華殿は強いのですか？」

「強いよ。少なくとも趙雲ちゃんには絶対に負けなくらいには」

「む・・・なら勝負と行きましよう!」

すこし挑発したように言っていると趙雲ちゃんのはのってきた。

「いいよ、じゃあ始めようか。雛里ちゃん・・・て早っ・・・」

みると雛里ちゃんは既に離れていた。

「はあ・・・まいつか。・・・それじゃあ趙雲ちゃん準備は良いかい?」

「もちろんですよ。」

俺らにはやりと笑う

「」「いざ・・・尋常に!」「」

「—————」勝負!!!!!!」

その時、チートVS昇り龍の勝負が始まった。

雜里と桜花の旅・・・4（後書き）

次は、趙雲編終わりです。そろそろはわわ軍師の登場かな

## 雜里と桜花の旅・・・5

「勝負！！！！！！」

そんな掛け声とともに、両者が構える。

先に動いたのは、趙雲。その赤い槍を突き出す、しかし桜花はそれを刀で滑るようになさず

「はい！はい！はい！！」

それを素早く引き戻し、連続して乱れづきを繰り出す趙雲。

「・・・ふっ！」

しかし桜花は余裕を持っていなしていく。

趙雲は未だ10歳。戦い方が熟練されておらず精々型が出来ている程度なのだ。だから簡単にいなすことが出来る。

「くっ・・・！はっ・・・！！この！」

「ふむ・・・腰の力が足りない。そんなんじゃすぐに・・・体勢を崩される。こんな風に」

そう言って趙雲の足を払い頭を掴み地面スレスレに押し倒す。遅れて体が地面に倒れる。

「あ・・・私の負け・・・？」

頭だけは桜花が掴んでいて地面に落ちない状態で趙雲は言った。

桜花は少しかがむような体勢で頭を掴んでいる。

「っと・・・立てるかい？」

「あ・・・はい・・・」

趙雲ちゃんに俺は問いかけた。だがっただけうつむいている・・・なぜだ？

「どうした？」

「・・・いえ、私は・・・今まで誰にも負けたことがなかったものですから・・・少し・・・」

ああ、つまり負けるわけがないと天狗になっていたわけか。納得だ

「まあ、上には上がいる。それを知ることにはさらなる武の高みへの道になる。精進しる趙雲ちゃん」

「・・・はい!!--」

決意したような顔で言う趙雲ちゃん・・・うん、よかったよ。でもまだ11歳なんだよね・・・背伸びしてるように見えて微笑ましい・・・

「くすつ・・・まあ頑張ってくれ趙雲ちゃん」

「・・・星」

「はっ？」

「星と呼んで下され、私の真名を預けるに値する人物とお見受けしました」

「・・・そつか。じゃあ、俺の真名も預けよう。俺は桜花、よろしくね星ちゃん」

「星ちゃっ・・・・・・・・!?!?ノノノノノ、よろしくお願いします・・・」

顔を赤くしながら星ちゃんはそう言った。

・

・

・

「もう行ってしまわれるのですか・・・」

「うん、俺達も行く場所があるからね」

「桜花さん・・・」

雛里ちゃんが復活したようだ

「もう大丈夫？」

「うん、もう大丈夫だよ」

「じゃあ、行こうか。またね星ちゃん！」

「！・・・はい！またお会いしましょう！！」

そんなこんなで、星ちゃんと別れたのであった。

・

・

・

で、やっととこを辿りついた県！！

「着いたね・・・」

「着いた・・・」

かなりの日数を経てやってきた異。  
俺が華琳ちゃんにあってから5年、雛里ちゃんと会ってから3年も経っている。

馬と違い、徒歩だし、なにより此処に来るまで色んな村々に滞在したからね。

「さて・・・と」

「どうするんですか？桜花さん」

「・・・洛陽と同じ方法で行こうか。」

「そうだね・・・わかったよ！じゃあ、お城に行こう！」

と言っわけで、お城に向かう俺と雛里ちゃんなのでした。

お城



「ねえ〜・・もついいでしょ〜？」

「駄目です。さっさと仕事してください」

「ぶう〜・・冥琳のケチ・・!!」

恨めしい目で見える孫策。しかし周瑜は涼しい顔をしている。

「申し訳ありません！報告があります!!」

と、そこへ伝令がやってくる。

「はあ、なんだ？」

「はい・・それが、門前に領主に会わせると言う二人組がいるのですが・・帰れと言っても聞かなくて・・」

「・・・・ふむ・・」

少しだけ考える仕草を見せる周瑜、しかし

「あ！じゃあ、見に行きましょう！領主に会いたいのなら会わせてやるつじやない!」

と孫策がずんずんと出て行ってしまった。

「はあ・・おいお前は持ち場に戻れ」

「はっ！」

周瑜は伝令に指示を飛ばし、孫策を追いかけた。

・

・

・

門前

桜花視点

「だから！領主に会いたいんだって！！いいじゃん会わせてくれた  
って！！！！」

「あわわ・・・桜花さん・・・そんなの通りませんよ普通・・・」

俺は門番に言う、雛里ちゃんはそんな様子を見てあわてている。

「だから！簡単に領主様に会わせられるわけがないだろう！！帰れ  
！！！」

「全く・・・話が通じねえ奴だな！領主を呼べ！」

「そんな店長を呼べ！みたいな流れで言うな！」

「そんなんだから門番から上に上がれないんだよ！」

「うるさいわ！門番の何が悪い！！俺だって頑張ってるんだ！！」

そんな喧嘩をしていると

「は〜い、じゃあその領主に会わせてあげるわ！！」

「ん？なんだお前は！そんなわざわざどこの誰とも知れない相手の前に出てくるふざけた領主がいるか！！」

「なによ！本当に私が領主なのよ！！代々続く孫家の一人孫策とは私の事なんだから！」

「・・・いや、ないだろう」

本当は、気づいているが面白いので放置

「なにようなによう・・・いいですよ〜どうせ私は領主らしくないですよ〜・・・」

あ、落ち込んだ。

「雪蓮・・・少しは王らしくしろ・・・」

「あ・・・だれ？」

振り返るとそこには眼鏡をかけた黒髪の女性がいた。というか周瑜

である。

やはり原作よりは幾分若い、無論孫策もだ。

さて・・・どうするか？

雜里と桜花の旅・・・5（後書き）

次回は孫策達との面会です。

## 雛里と桜花の旅・・・6

どうも桜花です。今俺と雛里ちゃんは門前から一転して城の中だ。理由は孫策ちゃんを周瑜ちゃんが連れていく際に俺達も来いと言ったからだ。

「・・・で？貴方達は何の用でここに来たの？」

孫策ちゃんがそう言う

「あ・・・あう・・・あわわ・・・」

なんか雛里ちゃんが・・・覇気？威厳？威圧感？的なものに押し潰されそうになってる。

陽ちゃんの時はこちらは行かなかったのにな。

「落ち着いて、雛里ちゃん。大丈夫俺が着いてる」

「あ・・・はふう・・・／／／／／」

俺は雛里ちゃんを抱きしめる。いつもこうすると雛里ちゃんは空気が抜けたように落ち着くのだ・・・なぜか知らんけど。

「よしよし、落ち着いたかな？」

「う・・・うん」

「あの、無視しないでほしいんだけど」

二人で話していたら孫策ちゃんがギャグ的な涙目でこっちに話しかけて来た。

「あ、ごめんね孫策ちゃん。」

「貴様！！その口のきき方はなんだ！！」

周瑜ちゃんが怒ったぞ！（RPG風）

「いいじゃないか 君達は領主と言ってもまだまだ十何年程度の人  
生しか歩んでないんだからさあ」

「桜花さん・・・自分主義すぎ・・・」

雛離ちゃんに呆れられたぞ！（RPG風）

「・・・まあ、いいわ。そっちの方が私も気楽だしね！」

「まったく・・・貴方はもう少し自分の立場を理解しなさい」

「ぶ〜・・・」

このやりとりはなんだか慣れた感じだ。これが親友たる付き合いの長さなんだろう。

「で、話を戻しましょうか。」

「ええ、そうね」

「俺らが此処に来たのは、此処で雇ってもらおうと思った次第です、

はい。」

「・・・それは客将として雇ってこと？文官や武官みたいに仕官させて欲しいってこと？」

雇えって言ってるのになんで士官の話が出てくんだちくせう・・・

「雇え、仕官、しない、分かった？」

「なんでそんな言葉づかいなの・・・？まあ、いいわ雇ったげる！」

孫策ちゃんが俺らの会話に入ってきてそう言った。関係ないけど雛里ちゃんは全然話さない。絶賛人見知り発動中だ

「こら雪蓮、勝手に決めないの！ぽつと出たような人間を疑いもしないで雇わない」

「ん〜じゃあ、試験をしましょう！！」

「試験？」

「そう！見たところ貴方は結構強そうじゃない！！だから私が直々に試してあげるわ！中庭へ」いや、私がやる。「なんで！？」

勢いで流そうとした孫策ちゃんを周瑜ちゃんが押しとどめる

「貴方は領主であり、この国の王なのよ。いい加減自覚なさい」

厳しい声で言う周瑜さん。孫策さんもその迫力に唖る。



「ぐ・・・分かったわよ・・・」

「ではついていよ。」

「はーい。さ、雛里ちゃん行こう？大丈夫、俺が傍に居るから。」

雛里ちゃんの手を握り、歩き出す

「！・・・うん！！」

・

・

・

中庭

「準備は良いか？」

周瑜ちゃんが言う

「無論、周瑜ちゃんこそやられる覚悟は出来たかな？」

「・・・ちやつ!? / / / / .. くつ .. 相当の自信があるようだな  
!」

「もちろん。君に負けるほど俺は弱くないんでね」

薄く俺は笑い、周瑜ちゃんは睨みつける。

「じゃあ、始めよつか」

俺は白刀と黒刀を抜かず、手鉄甲と脚鉄甲を装着

「さて・・・準備は良いかい？」

「ふむ・・・その腰のは使わないのか？」

「ふっ・・・これを使うまでも無いわ!」

思いつきり馬鹿にした顔で挑発してみる。

「き、貴様! ! ! ! !」

ん? まてよ...? 周瑜ちゃんって戦闘出来たっけ?

「喰らえ!」

周瑜ちゃんが鞭を振るってくる・・・しかしろくに使いこなせていな  
い・・・

俺はそれを掴み取り、引き寄せる

「きゃん!」

そうすると周瑜ちゃんが転んだ。やっぱり戦闘は出来ないみたいだ。てか原作じゃ病気だったんだし無理に決まってんじゃない。

「・・・周瑜ちゃん。君さ戦闘出来ないでしょ？」

「くっ・・・」

ほらね？

・

・

・

戻って再び城の中

「ま、合格ってことでいいじゃない？」

「むう・・・しかたあるまい」

すげえ簡単にいったね。やはり子供か・・・

「今、失礼なこと考えたでしょう？」

「やはり子供か・・・と」

「ぶん殴るわよ?」

「しつねーしましたー」

孫策ちゃんが不機嫌な顔をして

「帰れ、雇うのは無し」

「え、マジか・・・」

その後俺は大量の言い訳をしたが許してもらえずに追い出された。

その夜

周瑜視点

「はあ・・・」

今日来たあの男。悪い奴には見えなかったが、やはり他人を信用するのは簡単ではない。

それを考えても私は王の軍師、国の為には最善の判断をしなければならぬ。

「うぐ・・・くそ、病は少しずつ進行している・・・か・・・」

そう、つい最近になって治らないと分かった病気だ。

あまりこれと言った症状は出なかったが今日はあの男を相手に少し無理をしたせいか胸が痛む。

「・・・はあ・・・はあ・・・ふう・・・」

少しずつ痛みが治まる。落ち着いたところに聞き覚えのある声が聞こえた

「冥琳・・・大丈夫？」

そう、雪蓮だ。心配そうにこちらを見ている。病については雪蓮も知っている・・・余計に心配なのだろう・・・

「ああ、大丈夫だ・・・心配ない」

「嘘よ！・・・だって今にも死にそうな顔だったもの・・・」

雪蓮は涙目だ。私はなにも言えない

「……すまない……雪蓮。」

「いえ……ごめんなさい……一番つらいのは冥琳だもの……」

二人で落ち込んでしまつ……そんなところに聞こえたあの軽快な声

「どうした？孫策ちゃんに周瑜ちゃん？」

そうあの男だ。

「お前は……」

「ああ……俺の名前言ってなかったね？俺の名前は風華。よろしく」

「ああ……それで何しに来たのだ？ここは城の中だぞ」

私は気になって問いかけた。すると風華はなんのけも無く答えた

「いや、なんか泣きそうな声と苦しそうな声が聞こえたんでね？」

「そうか……」

「で、聞くけどさ？周瑜ちゃんって……病気？」

「……そうだ……もう治らない」

「いや治るよっ？」

わたしの病はもう治らない・・・それはもう諦めた

「ん？今何と言った？」

「いや治るよ？」

「本当！？」

雪蓮が顔を上げて詰め寄った

「うん・・・簡単に治る」

「どうすればいいの！？」

「いや、俺にしかできない。専用技みたいなものだからね」

「じゃあ、お願い！冥琳を直して！！」

雪蓮が涙をこぼしながら懇願している。

「私も・・・この身の病が治ると言うのなら・・・頼む！」

「・・・良いよ。条件付きで治してあげる」

すると風華は私に近づき、私の頭に手を載せた

「な、なにを・・・／／／／」

「ちよつと黙ってて・・・」

少しの沈黙・

その後、風華は手を離れた。すると体の中にあつたわだかまりというか重みやけだるさ、なにより痛みが消えた。

「こ、これは・・・」

「治ったみたいだね？」

風華は優しい笑顔を浮かべていた。

・

・

・

桜花視点

「治ったみたいだね？」

俺はそう言うと、周瑜ちゃんは驚いた顔をして固まった。

今俺がしたのは使える異常・過負荷のうちの1つ『快気祝リカバリーい』を使ったのだ

これは、病気であればなんでも問答無用で治してしまうスキル、で



も怪我や肉体的損傷に関しては無力だ。

「んじゃ、俺は宿に帰って寝るわ。雛里ちゃんが起きたら困るしね・  
ふあ・・・」

あくびを一つ残して言葉を失っている二人を尻目に俺は帰った。

・

・

・

### 翌朝、宿の食堂

「どうしようか・・・これから」

「桜花さんのせいだからね」

「分かってます・・・ハイ」

どうしようかな？本当

そんなことを考えていたら、急に食堂がざわついた。俺は入口の方

を見るとそこには

「あ、いた!」

桃色の髪に探し物を見つけた時の様な顔を浮かべた女性。

つまりは孫策ちゃんである。その後ろには周瑜ちゃんもいる

「桜花さん・・・なにしたの?」

「うん・・・何の用かな?」

雛里ちゃんと俺は孫策ちゃんが来る間、そんなことを話していたのだった。

雜里と桜花の旅・・・6（後書き）

次で、多分呉から出ます。もうはやく原作入りたい。  
オリジナルストーリー考えるのも大変なので

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1811ba/>

---

世界を周るは転生者(チート) in 恋姫無双

2012年1月15日03時47分発行